

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 乙 第	号
------	-------	---

氏 名 櫻井 映子

論 文 題 目

ロシア語との対照分析とアンケート調査に基づいた
リトアニア語拡大アスペクト論

—バルト・スラヴ諸語の動詞の比較対照研究によせて—

論文審査担当者

主査	名古屋大学	教授	佐久間淳一
委員	名古屋大学	教授	町田 健
委員	名古屋大学	教授	大室剛志
委員	神戸市外国語大学	名誉教授	井上幸和

【本論文の概要】

ロシア語にはいわゆる完了体・不完了体からなる動詞の対が存在し、本源的不完了体動詞に対して、一定の接頭辞を有する完了体動詞が、典型的な imperfective と perfective のアスペクト的な対立を表わしているが、リトアニア語にも、意味的に対応しつつ、接頭辞の有無が異なる動詞の対が存在する。従来の研究では、この対も、ロシア語の完了体（以下 PFV 動詞）・不完了体（以下 IPFV 動詞）からなる対と同等の意味的な対立を表わすと考えられてきた。しかし、論者によれば、この対応は、外見的な類似を示しているに過ぎず、リトアニア語のアスペクトを正しく理解するためには、テンス形式との相関や、各形式がテキスト中で持つタクシスの機能との関係についても考える必要があるとし、「拡大アスペクト論」を提唱した。

まず、第1章では、バルト諸語、特にリトアニア語のアスペクトとテンスをスラヴ諸語との比較対照を通して概観し、バルト諸語では、文法的なカテゴリーとしての動詞アスペクトが、スラヴ諸語、特にロシア語のようには発達しておらず、テンス形式の持つアスペクト的な意味内容がより具体的であることを明らかにした。

第2章では、リトアニア語の動詞が持つアスペクト的な特徴をロシア語との比較対照を通じて概観し、リトアニア語の動詞は、PFV 動詞・IPFV 動詞ではなく、限界動詞・非限界動詞に分類すべきであるとし、限界性に基づく動詞の分類法を提示した。

第3章では、リトアニア語とロシア語の対訳テキストを使って、両言語の動詞分類の対応関係を検証した。また、リトアニア語の動詞の各テンス形式と状況語の共起関係に関するアンケート調査によって、各テンス形式が限界性との相関によって表わす意味を明らかにした。

続く第4章では、リトアニア語の形容詞的分詞、副詞的分詞が表わすアスペクトの意味をロシア語の分詞と比較対照しながら論じ、リトアニア語の分詞はロシア語よりも幅広い機能を担っている一方、その用法においては、より厳しい語彙的・意味的な制約が課されていることを明らかにした。

第5章では、リトアニア語とロシア語のアスペクト・テンス体系の大きな相違点の一つであるリトアニア語のパーフェクト形および進行パーフェクト形について、その分布を単純テンス形と比較し、複合的なアスペクト構造であるパーフェクト形が表わすパーフェクト性を大規模なアンケート調査によって明らかにした。

第6章では、これもロシア語には存在しない習慣過去形について、その分布を一般的な過去形と比較し、前章同様、大規模なアンケート調査によって、習慣過去形が多義的、多機能的であり、マクロ場面においては同時性の、個々のミクロ場面においては順次性ないし同時性のタクシスを表わすことを明らかにした。

論文審査の結果の要旨

【本論文の評価】

リトアニア語の研究はロシア語研究の強い影響下にあり、加えて、接頭辞の有無で対立するリトアニア語の動詞の対は、ロシア語のいわゆる完了体・不完了体の対と外見上はきわめてよく似ていることから、リトアニア語のアスペクト体系は、長らくロシア語のそれと同一視されてきた。ソ連邦からの独立後、リトアニア語研究の脱ロシア語化が進められてきた中でも、ことアスペクト研究に関しては旧態依然であり、わずかにリトアニア語を母語としない研究者の間で見直しの動きが出てきているに過ぎない。本論文における論者の研究も、そうした数少ない研究に連なるものだが、リトアニア語のアスペクト体系をテンス形式まで含めて包括的かつ詳細に論じ、ロシア語のアスペクト体系とは大きく異なることを示した点、そして、リトアニア語の母語話者ではない論者がそれを成し遂げたことは高く評価できる。特に、第5章、第6章で取り上げられたパーフェクト形および習慣過去形の意味、機能、用法については、従来、観念的に理解されてきたに過ぎず、10代から80代にわたる総計282人を対象とした大規模なアンケート調査によってその実態を明らかにしたことは、本論文の最大の功績と言える。また、本論文が提示しているリトアニア語のアスペクト体系の分析は、むしろロシア語のアスペクト体系の方が特殊で、リトアニア語のそれは、言語類型論的に見てより一般的な体系に近いことを示していて、概ね首肯できるものであり、妥当性が高い。こうした研究成果は、リトアニア語研究の発展につながることはもとより、リトアニア語教育にも裨益するところが大きいであろう。

もちろん、限界性による動詞の分類の妥当性の検証など、さらに検討が必要な事項もあり、アスペクトとモダリティー、あるいは統語事象との関係など、未解明の問題も少なくない。また、ソ連時代を経験したリトアニア人のリトアニア語には、ロシア語の干渉によってテンス・アスペクト形式の用法にゆれが生じている可能性があり、実際、本論文の研究手法上の最大の特徴であるアンケート調査の結果においても、世代によって用法に違いがあることが明らかにされているが、これらのゆれが一過性のものなのかどうかを明らかにするには、いっそう詳細な調査が必要であろう。しかし、これらの問題は、ある言語のアスペクト体系の全貌を明らかにしようとするような射程の大きい研究には必然的に生じ得るものであり、本論文の学術的価値を損ねるものではない。また、本論文では、ロシア語のアスペクト体系との違いを強調するあまり、両言語の類似点については過小評価されているきらいがあるが、上述のようなリトアニア語研究の歴史を踏まえれば当然のこととも言え、論者の主張が広く受け入れられていけば、その過程で、おのずと解決される問題だと考えられる。

以上により、本論文は極めて高い学術的価値を有することが認められ、審査委員一同、一致して、博士（文学）の学位を授与するにふさわしいと判定した。